

フィリップス, フェントンとゲイの飲酒詩

著者名(日)	海老澤 豊
雑誌名	駿河台大学論叢
号	63
ページ	1-14
発行年	2022
URL	http://doi.org/10.15004/00002451



フィリップス、フェントンとゲイの飲酒詩

海老澤 豊

酒を主題にした詩歌は古今東西を問わず書かれてきたが、18世紀初頭の英国ではエール、葡萄酒、林檎酒を主題にしたバーレスク風の飲酒詩が相次いで世に出た。ジョン・フィリップス（1676-1708）の「光り輝くシリング銀貨」（1705）は、借金取りに追われながらもエールを求めて呻吟する貧しい詩人の姿を描いている。⁽¹⁾ フィリップスには『林檎酒』（1708）という作品もあるが、これについては既に別のところで論じたので、本論では触れる程度に留めたい。⁽²⁾ イライジャ・フェントン（1683-1730）の『穀物酒』（1706）は英国特産のエールが外国の葡萄酒に優るといふ主題を扱ったものである。⁽³⁾ ジョン・ゲイ（1685-1732）の『葡萄酒』（1708）は英国の酒場でいかに葡萄酒がもてはやされていたかを如実に描き出している。⁽⁴⁾

この四篇はいずれもミルトン（1608-74）の『失樂園』（1667-74）を意識したブランク・ヴァースで書かれている。詩人たちはミルトンの高遠な文体と表現を模倣しながらも、飲酒という卑近で些細な主題を扱っており、彼らの飲酒詩は形式と内容の齟齬から生まれる滑稽味を狙ったバーレスクである。その嚆矢となったのは「光り輝くシリング銀貨」であるが、ミルトンの影響を度外視すれば、桂冠詩人ネイアム・テイト（1652-1715）がヒロイック・カプレットで書いた『万能薬、茶に関する詩』（1700）も詩人たちに手本を示した。この作品は当時英国で流行し始めた茶の薬効を物語風に説く教訓詩だが、テイトの筆遣いは滑稽味を帯びており、『万能薬』の成功によって、各種の飲料を主題とした一連の模倣作が生み出されることになった。⁽⁵⁾

1. フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」

ジョン・フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」は、屋根裏部屋で暮らす困窮した詩人がエールを求めて呻吟し、借金取りの取り立てに怯えるという卑俗な主題を、ミルトンの崇高なブランク・ヴァースで描いた143行のバーレスクである。フィリップスがこの作品の献辞にするつもりで大学の学友ウィリアム・ブロムに宛てて書いた文章には「この詩の主題は私自身で、いまだ他の詩人に扱われたことがない」と記されており、また「倫理や、主題の目新しさ、イメージの多様性、これが作られた類似性の正確さを考えると、現代人にも古代人にも匹敵することのない作品」であると自負を表明している。⁽⁶⁾

「光り輝くシリング銀貨」は発表当初から好評を持って迎えられた。ヘイヴンズによれば、この詩は1720年までに単独あるいは詩選集に収められたものを含めて9度も出版された。しかも18世紀を通じてこの詩は名声を保ち、その模倣作も少なくない。フィリップスは「大詩人では決してないが、影響力は大きかった」のである。⁽⁷⁾ ボンドもこの詩が「ブランク・ヴァースで書かれた崇高様式の短く、巧妙で、見事なパロディを提供」したために、他の詩人たちに与えた影響はとて大きく多様であり、18世紀前半に「ブランク・ヴァースで書かれた明白なバーレスク詩が24篇以上も記録されている」と指摘する。⁽⁸⁾

アディソンは『タトラー』第249号（1710）で「光り輝くシリング銀貨」を「英語で書かれた最良のバーレスク詩」と絶賛し、⁽⁹⁾ ヘンリー・フェルトンはフィリップスが偉大な巨匠ミルトンの足取りの一番近くを歩んでいると述べ、「シリング銀貨は彼の詩行で本当に輝いており、彼の詩はプレミアムが記憶され、英国で林檎酒が飲まれる限りは、未完の城よりも長く生き永らえるであろう」と称賛する。⁽¹⁰⁾

ゴールドスミスは「英語におけるミルトンの最良のパロディ」であるこの詩は「100回も」模倣されてきたが、二番煎じの作品はいずれも失敗に終わっており、「一度やりかたを示されてしまった後では、誰かの作風をバーレスクにすることは容易なことではない」からだとして記している。⁽¹¹⁾

フィリップスがこの詩のエピグラフに選んだのは「歌いたまえ、天上の詩神よ、散文でも韻文でも試みられたことのないもの、シリング銀貨、半ズボン、キマイラの恐怖を」(*Sing, Heavenly Muse, / Things unattempted yet in Prose or Rhime, / A Shilling, Breeches, and Chimera's Dire*) という詩句である。最初の2行は『失樂園』第1巻5行と16行から、3行目の「キマイラの恐怖」は第2巻628行から取られている。⁽¹²⁾「シリング銀貨」と「半ズボン」(ブリーチ)は何とも人を食った詩句で、この作品がバーレスクであることを如実に示している。

「光り輝くシリング銀貨」は「幸いなるかな、心労も争いもないままに、絹や革の財布に光り輝くシリング銀貨を保持する者は」(HAPPY the Man, who void of Cares and Strife, / In Silken, or in Leathern Purse retains / A Splendid Shilling, ll. 1-3) というホラティウス風の詩句で始まる。なぜなら懐が温かい者は、行商人の「新鮮な牡蠣」という呼び声を聞いて苦しまず、陽気なエールを求めて嘆息せず、夜な夜な酒場に出かけてクロエヤフィリスに乾杯し、煙草をふかしながら仲間と楽しい会話を交わすからだ。だがフィリップスの自画像とおぼしき貧しい詩人は、このような愉しみを奪われている。

だが私は、つかんで離さぬ「貧困」や、「欠乏」の
信頼する従者たる「飢え」に付きまといわれて、
わずかな屑肉や、少量の酸っぱい酒で
(惨めな食事だ) 痩せた肉体を維持するのだ。

But I, whom griping Penury surrounds,
And Hunger, sure Attendant upon Want,
With scanty Offals, and small acid Tiff

(Wretched Repast!) my meagre Corps sustain: (ll. 13-6)

外を散歩するか、寝てしまうかしかない金欠の彼は、薄汚れた屋根裏部屋で温まろうと、鼻持ちならない臭いのする「マンダンガス」(*Mundungus*, l. 21) 煙草を黒く短いパイプで吸うが、これはウェールズ人なら決して吸わないような代物であるという。ここでフィリップスは脱線してチェシャーチーズを売り歩くウェールズの行商人を想起する。彼らは伝説的な古代ウェールズの王カドワラダーやアーサーの子孫であり、「アルヴォニア」(*Arvonian*, l. 29), 「マリドウヌム」(*Maridunum*, l. 30), 「ブリキニア」(*Brechinia*, l. 31), 「アニコニウム」(*Ariconium*, l. 32) などウェールズの各地域を行商して回るのだ。これらはローマ人が命名したラテン語の地名であり、現在の呼び名で言えば、順にカーナヴォン、カーマゼン、ブリコン、ヘリフォードとなる。フィリップスがこれらの聞き慣れない名辞を故意に用いるのは、『失樂園』に頻出する異国的な響きのする地名の模倣であろう。ちなみにアニコニウムには「神酒のごとき果実酒があふれ」(*flow Nectareous Wines*, l. 33), イタリア各地の有名な葡萄酒とも十分競えるとあるが、これは後に代表作『林檎酒』の主題となっていく。

屋根裏部屋で味気ない時を過ごす詩人が恐れるのは、執行吏つまり借金取りである。

神々や人間に憎まれる恐ろしい怪物が、
高く聳える我が牙城に登ってくる。
高鳴る踵で三度、我が門に雷鳴を轟かせ、
忌まわしき口調で三度呼びかける。

Horrible Monster! hated by Gods and Men,
To my aerial Citadel ascends;
With Vocal Heel thrice thund'ring at my Gates,
With hideous Accent thrice he calls; (ll. 37-40)

彼は驚愕し狼狽して薪を貯蔵する暗い隅に逃げ込むが、突然の恐怖のために髪は逆立ち、冷たい汗が

震える体を濡らし、舌はもつれて言葉も発せなくなる。執行吏の真青な額は「幾重もの皺に掘り抜かれて」(Entrench'd with many a Frown, l. 49) いるが、これは『失樂園』第1巻でサタンの顔には「雷撃の深い傷が掘り抜かれていた」(Deep Scars of Thunder had intrencht, l. 601) を模したものだ。グリフィン是指摘する。⁽¹³⁾ 執行吏が取り出した長い巻物には恐ろしい文字や数字が記されており、詩人はこのような禍を逸らしたまへと神々に祈るばかりである。しかし執行吏の背後には別の怪物である執達吏が控えており、そやつが債務者の肩に手を触れるや、たちまち彼の体は自由を奪われてしまうのだ。

どこかの魔法をかけられた城に運ばれ、
そこで難攻不落の門と強制的な鎖が
彼を厳しい監禁に留める、銭の形をした
パラスが捕囚を自由にするまでは。

To some enchanted Castle is convey'd,
Where Gates impregnable, and coercive Chains
In Durance strict detain him, 'till in form
Of Mony, *Pallas* sets the Captive free. (ll. 64-7)

これがエドモンド・スペンサー (1552-99) の『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-6) を模した詩行であることは明らかだが、ここでいう「城」はもちろん債務者監獄のことである。また「パラス」つまりアテナは英雄たちの危難に際して救援に訪れる女神を指すが、借金取りに追われる詩人を英雄と見なすことはまったくできないし、彼を解放するのはただ金銭のみである。ここでは表面上は英雄詩の表現を装いながら、その実は借金取りに脅える情けない男の心情を歌っているのだ。かくしてフィリップスは債務者に対して、街を歩く時にも狡猾な執行吏の目を絶えず意識せよと教訓を語る。この卑劣漢は債務者の足取りを遠くから見つめ、街角に潜み隠れて「汚らわしい肩たたき」(unhallow'd Touch, l. 73) で債務者に魔法をかけるからだ。

さらに執行吏はさまざまな動物に喩えられる。「老いた牝猫」(*Grimalkin*, l. 74) は用心深い目で夜

ごとに壁の割れ目を眺め、無情な爪で思慮なきネズミに確実な破滅をもたらす。また「アラクネー」(*Arachne*, l. 79) すなわち蜘蛛は、腸から引き出した網を広間や台所に広げて獲物を待ち構えている。

狡猾なスズメバチ、羽音を立てる雄蜂、
金色に飾り立てられた翅を広げて
誇らしげな蝶も、その罠に絡め取られ、
無益な抵抗を試みる。飢えた足取りで
彼女は登りながら待ち望んだ獲物に急ぐ。
そして毒を注入する顎で、生きた血を
嫌がる敵どもから啜り、勝ち誇りながら
大きな死骸を貯蔵庫へ引きずって行く。

The Wasp insidious, and the buzzing Drone,
And Butterfly proud of expanded wings
Distinct with Gold, entangled in her Snares,
Useless Resistance make: With eager strides,
She tow'ring flies to her expected Spoils;
Then with envenom'd Jaws the vital Blood
Drinks of reluctant Foes, and to her Cave
Their bulky Carcasses triumphant drags. (ll. 85-92)

退屈な夜を過ごすより他にない困窮した詩人は、洒脱な恋愛詩人ウォラーのごとく「森やテンニンカの木蔭」(of Groves and Myrtle Shades, l. 103) について歌おうとするが、結局は「水音を立てる河畔で絶望した貴婦人や、柳の木にぶら下がった失恋男」(desperate Lady near a purling Stream, / Or Lover pendent on a Willow-Tree, l. 105) を描いてしまう。彼の干からびた喉は救いを見出すことができず、寝ている間も夢の中でエールを求めるが、目覚めてから鎮まっていた渴きにいつそう苦しめられる。また彼は太陽の温和な光が成熟させる果物、すなわちジョン林檎、和毛の生えた桃、粗い溝のついた外皮に包まれたクルミ、腐敗してから美味となる花梨も食することができない。

しかし詩人を最も苦しめるのは、エピグラフに掲げられた「半ズボン」(ガリガスキン) に空いた穴に他ならない。これは十六世紀や十七世紀の肖像画

に見られる、ゆったりとした膝丈までの男性用ズボンを指す。エドモンド・スミスが「これは見事なまでに哀れを誘い、地上の事物のはかなさをとてもうまく示している。残りの部分は驚異的な高みに達しており、グリーンランドの人間もこれほど哀れで恐ろしい不満を漏らすことはあるまい」と評した部分である。⁽¹⁴⁾

私のゆるやかな半ズボンは、冬の猛威や
 侵食する霜に長いこと耐えてきたのだが、
 時に征服され（時が征服しえぬものがあるのか）
 恐ろしい深淵が口を開き、大きな穴が
 途切れ途切りに開いてしまった。そこへ
 東風や南風、そして極地クロニアの波をも
 凍らせてしまう北風の恐ろしい力が
 ひどく冷たい突風となって荒々しく侵入し、
 おこりを予兆する…

My Galligaskins that have long withstood
 The Winter's Fury, and Encroaching Frosts,
 By Time subdu'd, (what will not Time subdue!)
 An horrid Chasm disclose, with Orifice
 Wide, Discontinuous; at which the Winds
 Eurus and Auster, and the dreadful Force
 Of Boreas, that congeals the Cronian Waves,
 Tumultuous enter with dire chilling Blasts,
 Portending Agues… (ll. 121-9)

注釈によれば、これは『失楽園』第10巻の一節を典拠にしており、「死」と「罪」が地獄から地上につながる道を混沌の上に押し固めていく際の比喻である。

あたかも二つの極風が、クロニア海で
 対峙して吹き荒れ、ともに氷山を
 押し流して、ペツォラ川を越えて東方へ、
 豊かなキャセイの岸に向かう想像上の
 航路を塞ぐごとし。

As when two Polar Winds blowing adverse

Upon the Cronian Sea, together drive
 Mountains of Ice, that stop th' imagind way
 Beyond Petsora Eastward, to the rich
 Cathaian Coast. (10: 289-93)

ミルトンは北極から強風によって押し流された氷山が、ヨーロッパからロシアを経て中国へ向かう北極航路を塞いでしまうという壮大な情景を描いている。一方でフィリップスはミルトンの高遠な詩句を借用しながらも、半ズボンに開いた穴から風が吹き込んで寒くてたまらないということを誇張して歌っているだけである。これが高遠な文体で卑近な内容を歌うというパーレスク的手法である。

さらにフィリップスは半ズボンの穴から吹き込む寒風について、神話上の怪物スキュラとカリュプデスに衝突して難破する船を比喻として用いる。耐えられないほどの激しい衝撃を受けたオーク材の船腹に大きな口が開き、そこから次々と波濤が押し寄せ、見る見るうちに海水が船倉にたまっていく。

…恐怖が
 水夫らを捉え、死が彼らの眼の中に浮かぶ、
 目を見開き、わめき、ポンプで排水し、罵り、祈る。
 （無益な努力だ）なおも打ちつける波が
 無情に押し寄せ、ついに泡であふれ、
 船は浸水して広大な深淵に沈んでいくごとし。

…Horrors seize
 The Mariners, Death in their Eyes appears,
 They stare, they lave, they pump, they swear, they pray:
 (Vain Efforts!) still the battering Waves rush in
 Implacable, 'till delug'd by the Foam,
 The Ship sinks found'ring in the vast Abyss. (ll. 138-43)

このようなカタストロフィー的な結末は、その後のパーレスクにも受け継がれることになる。フィリップスは英国の戦勝をトーリーの立場から称賛する英雄詩『プレニム』（1705）の冒頭で「はい

つくばる詩神は卑俗で惨めな主題から、今や天空に舞い上がる」(From low and abject Themes the Grow'ling Muse / Now mounts Aerial, ll. 1-2)と歌う。⁽¹⁵⁾「卑俗で惨めな主題」が「光り輝くシリング銀貨」を指すことは間違いないが、高遠なミルトンの文体で卑近な主題を歌うというバーレスク的な手法は、この短詩によって確立されたのである。

2. フェントンの『穀物酒』

イライジャ・フェントンはポーブのホメロス英訳を手助けた文人として知られる。ジョンソンの「フェントン伝」によれば、翻訳に飽いたポーブは『オデュッセイア』の第1, 4, 19, 20巻をフェントんに割り当てた。またジョンソンの伝える挿話では、肥満体でものぐさなフェントンは遅くまで寝ていて、ベッドに寝たままスプーンで食事を取り、起きても書物や書類に向かう坐業を好んだという。⁽¹⁶⁾ポーブは1730年7月のゲイ宛書簡で、長年にわたって尊敬してきた5歳年上の友人フェントンが「怠惰と無気力」(実際は痛風らしい)のために死去したことを知らせ、運動を欠かさないようにとゲイに忠告している。⁽¹⁷⁾

『穀物酒』は長らくジョン・フィリップスの作とされてきたために、フェントンの詩集に収められることはなかった。フェントンはトマス・ウォートン(父)に宛てた1707年の書簡で「フィリップス氏がポモナ(『林檎酒』を指す)を出版すると聞いて喜んでます。書肆はどこでしょうか」とあり、『ブレニム』の作者(フィリップス)が忘れ去られるまで、私はもうミルトンの模倣をしないと彼(サッシュェヴァレル氏)に伝えて下さい」と記している。⁽¹⁸⁾すでに当時から『穀物酒』がフィリップスの作品だと誤解されていたことがうかがわれる。またフェントンは自ら編纂した『失楽園』(1725)の序文にあたる「ミルトン伝」において「我が英国の詩人でミルトンほど多くの称賛者を興奮させ、その詩風を模倣させた者はいなかったが、ミルトンと競おうと熱望した者も一人として知らない。非凡なる故フィリップス氏でさえ、その文体の綾において、偉大な原典

に似せようとしたあらゆる模倣者の中で最もミルトンに接近しているが、父に対する敬意のために遠回しに進み出たにすぎない」と述べている。⁽¹⁹⁾フィリップスに対する競争心が感じられる発言だが、自作の『穀物酒』に相当の自信を持っていたのであろう。

ここまで『穀物酒』と訳してきた作品の原題は *Cerialia* で、これは古代ローマ時代に豊穡や穀物の女神ケレスを祀る「ケリアリア祭」(4月12日から19日)を指し、その最終日には各種の競技祭が行われたという。⁽²⁰⁾だがこの作品は葡萄酒とエールの優劣をめぐる論争が展開されるという内容であるため、本書では『穀物酒』(ケレスの酒)と表現することにした。

1704年にスペイン継承戦争の一端であるブレニムの戦いで、チャーチルがフランス・バヴァリア連合軍を打ち破り、詩人たちは祖国の英雄を讃える詩を書くように政治家から委嘱された。アディソンの「会戦」(*The Campaign*, 1705)とフィリップスの『ブレニム』(1705)は、それぞれホイッグとトーリーの立場を代弁したものである。フェントンの『穀物酒』(1706)もチャーチルの戦勝を契機にして生まれた作品だが、政治色はきわめて薄い。というのも「天界の神々の秘密会議において、ひどい論争を巻き起こした、英国の飲酒と酒精の強い穀物について、天上に生まれた詩神よ、歌え」(Of English *Tipple*, and the potent Grain, / Which in the Conclave of Celestial Pow'rs / Bred fell Debate, Sing Nymph of heav'nly Stem, ll. 1-3)と始まるこの詩は、オリュンポスの神々がチャーチルの健康を祝して乾杯する際に、エール(穀物酒)を推すケレスと葡萄酒を推すバックスが言い争い、最後は主神がエールに軍配を上げるという筋書きだからである。

作品の序盤には「ペンマンマー」(Pen-main-maur, l.4), 「プリンリモン」(Plinlimon, l. 28), 「アリコニウム」(Uriconium, l. 34)など、フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」や『林檎酒』に見られる地名が続出し、『穀物酒』がフィリップスの作品とされた遠因となったことは想像に難くない。またヘイヴンズは『穀物酒』をフィリップスの作品としながら

も、その冒頭には『失樂園』の冒頭（万魔殿の会議を指すのであろう）を模した形跡が明らかで、多くの表現が『失樂園』からの借用であると指摘する。⁽²¹⁾

『穀物酒』の読解に移ろう。天上にチャーチル率いる英国軍の勝利のほうが届くや、バックスは「天上界の特質に同化して、活力のある靈液に仕込まれた」(in heav'nly Veins / Assimilated, vig'rous ICHOR bred, ll. 53-4) ために、イタリアやフランスやスペインの葡萄酒を凌ぐに至った、甘美な葡萄酒（ネクターと呼ぶべきか）を神々にふるまい、夕暮れまで酒神祭を続けるべきだと進言する。そこで暗く沈んだ顔をしたケレスが立ち上がり、衣の下から大麦（オリュンポスでは「クリーゼ」と呼ばれる）を取り出して、「英国の軍隊は戦功の名声とさらに倍増された勇敢さをエールに負っている」(to this … / The *British Cohorts* owe their Martial Fame / And far Redoubted Prowess, ll. 75-7) と叫ぶ。

続いてケレスは英国の兵士たちを脱皮する蛇に喩える。冬眠から目覚めて巣穴から這い出した蛇は、夏の陽射しを浴びると脱皮して、すばやく藪を通り抜ける。

牙を研いで、鶏冠のついた頭を恐ろしげに掲げ、両目から充血した光線を反射するように放つと、遠くの農夫たちはその色とりどりの首や、黄金を散りばめたとぐろを称賛する。同様に苦しめられた戦士は杯を傾けるたびに、活力が甦り、身の毛もよだつ武器を取るのだ。

Whetting his Sting, his Crested Head he Rears
Terrific, from each Eye retort he shoots
Ensanguin'd Rays, the distant Swains admire
His various Neck, and Spires bedropt with Gold.
So at each Glass the harrast Warriour feels
Vigour reate, his horrent Arms he takes, (ll. 88-93)

これは『失樂園』第9巻の一節を模しており、蛇の体に入り込んだサタンがイヴを誘惑するために近づいて行く場面が原典になっていると推測され

る。

頭を鶏冠のように掲げ、目は紅玉のごとく、
緑なす黄金色に輝きわたる首を、輪を描く
とぐろの中で直立させ、草の上を波打って
浮動していった。その姿は快いもので、
愛らしくさえもあった…

Crested aloft, and Carbuncle his Eyes;
With Burnisht Neck of verdant Gold, erect
Amidst his circling Spires, that on the grass
Floted redundant; pleasing was his shape,
And lovely… (*Paradise Lost*, 9: 500-4)

無気力な冬眠状態から目覚めて、陽光を浴びたことで活発に動き出す美しい蛇のように、英国の兵士はエールを飲んで元気を取り戻すとケレスは言うのだが、何とも合点のいかない比喻である。語彙や表現はミルトンに倣っているものの、蛇の正体は人類の敵たるサタンであり、それを英国の兵士になぞらえるのは不適切であろう。しかしながらエールで精力を取り戻した兵士たちは「死を免除された神々のごとく勇敢に」(Dauntless as Deities exempt from Fate, l. 103) 敵陣に攻め込んで殺戮の限りを尽くすのである。

なおもケレスはエール礼賛の長演説を止めようとしない。英国人はダヴ川やトレント川に洗われる土壌で黄金色に波打つ「クリーゼ」(Crithe, l. 111) から作られたエールを飲み干して称賛し、極地の小屋や岩穴で暮らす人々は炬を囲んで「陽気なエール」(laughing ALE, l. 124) を回し、大きなサーロインが供されるアーサー王の円卓でもエールは欠かすことのできない飲料であった。エールの織りなす木蔭が「震えるアラブ人の放浪する一族を、熱帯のヤドカリから親切にも覆い隠す」(Screens hospitably from the Tropic Crab / The Quiver'd Arabs vagrant Clan, ll. 140-1) に至っては脱線と言うしかあるまい。

再びケレスはエールが英国人に戦意高揚を始めとする種々の効用をもたらすと主張する。

…四周を大海原に囲まれた
英国が自らの何を世界に誇るといふのか。
エールこそは母国の主張を擁護する英国人を
温め、海軍の斉射する大砲を轟かせて、
敵対する軍勢に恐ろしい運命をもたらす。

... What, tho' Britannia Boasts
Her self a World, with Ocean Circumfus'd?
'Tis ALE that warms her Sons t' assert her Claim,
And with full Volley makes her Naval Tubes
Thunder disastrous Doom t' opponent Pow'rs! (ll.
156-60)

この詩行は『失樂園』第6巻の最後で、キリストが反逆天使たちに雷霆を放つ場面を参考にしてしていると推測される。御子が英国軍、悪魔たちが敵軍に置き換えられているわけである。

彼らの常なる活力は奪い去られて、
消耗し、生気を失い、苦しみながら倒れた。
だが御子は力の半分しか出しておらず、雷霆の
斉射を途中で止めた、彼らを破滅させずに、
天界から根こそぎにするのが御心であった。

And of thir wonted vigour left them draind,
Exhausted, spiritless, afflicted, fall'n.
Yet hald his strength he put not forth, but checked
His Thunder in mid Volie, for he meant
Not to destroy, but root them out of Heav'n:
(*Paradise Lost*, 6: 851-5)

またエールは学問を奨励し、精神を興奮させて「快活な小唄や魅力的な歌」(Ditties blithe, and charming Song, l. 164) に誘い、讚美歌を高らかに歌わせ、「チェスター風」(Cestrian, l. 169) の舞踏に興じさせる。さらにエールで酩酊した赤ら顔の学生たちは、学生監に見つけられた途端に逃走するが、その際に方々に投げ捨てられた帽子が乱舞するさまは、「激しいノルウェーの嵐」(fierce Norwegian

Tempests, l. 196) が吹き荒れるさまに喩えられる。これらはエールの効用とは言い難いが、フェントンは「光り輝くシリング銀貨」のようなバーレスクの効果を狙ったつもりなのであろう。

ケレスが語り終えると、主神は厳かに頷き、ガニメデが神々にエールを注いで回る。アポロは豎琴でフリギア調の好戦的な音楽を奏で、詩神たちは交互に歌うが、ひとりバックスはつぶやきながら、集った神々の前を去るのである。

フェントンの『穀物酒』はブレニムの戦勝を寿ぐ称賛詩からはほど遠く、バーレスクとしての面白みにも欠けることは否定できない。彼がこの詩を自分の詩集に収録しなかったのも納得できる。ただし『穀物酒』はフィリップスの『林檎酒』やゲイの『葡萄酒』よりも早い時期に、ミルトン風のブランク・ヴァースを用いて飲酒を主題にした詩として発表されたことは重要であろう。

3. ゲイの『葡萄酒』

『失樂園』のバーレスクとして書かれた、ジョン・ゲイの最初期の作品『葡萄酒』は1708年5月に匿名で出版された。やはりミルトンの文体を用いて同様の飲料を主題とした、フィリップスの『林檎酒』が同年1月に出版されており、ゲイはこの作品に刺激を受けたものと考えられる。『葡萄酒』はゲイの生前に発表された『折々に書かれた詩集』(1720)に含まれておらず、これは若書きの作品にすぎないというゲイ自身の判断によるものと推測される。⁽²²⁾ ドブソンは『葡萄酒』が1720年詩集に収録されなかった理由は、『失樂園』よりも「光り輝くシリング銀貨」を思わせるためだとしていたが、⁽²³⁾ DNBでは『葡萄酒』が「ブランク・ヴァースで書かれていたため」と修正している。確かにゲイの主な作品はヒロイック・カプレットで書かれており、彼があえてブランク・ヴァースを用いて『葡萄酒』を書いたのは、フィリップスに倣った修業時代の腕試しのためとも考えられる。

ゲイが『葡萄酒』の冒頭に掲げたエピグラフは、ホラティウスの『書簡詩』第1巻第19番から「水

しか飲まない者がものした詩は、書くだけ無駄で、永続しないし、人を喜ばせない」(2-3行)という詩句である。⁽²⁴⁾ この書簡詩にはホメロスが葡萄酒を称えたために酒飲みだと思われたなどの詩行もあり、詩人と飲酒の深い関係を歌っている。『葡萄酒』は「地上における幸福と、人間のさまざまな喜びがあふれ出る源について、歌いたまえ、天上の詩神よ」(Of Happiness Terrestrial, and the Source / Whence human pleasures flow, sing *Heavenly* Muse, ll. 1-2) という祈願に続き、魂に活力を与え、老人を若返らせる「滋養のある気付け薬」(Cordial restorative, l. 10) たる酒を主題にすることを明らかにして、最後に酒神バックスに靈感を与えられてペガサスの翼で高く舞い上がり「私はミルトン風の歌を奏でよう」(I draw Miltonic Air, l. 15) と序歌を締めくくる。

ヘイヴンズは「ミルトン風の歌」について「語順の転置、挿入句、形容詞を副詞として使うこと」などをその例として挙げており、⁽²⁵⁾ 『失樂園』からの具体的な借用については、デアリングとベックウィズの注釈に詳しく記されている。⁽²⁶⁾ 一方でゴードは『葡萄酒』は「格別ミルトン風でも、ホラティウス風でもないが、ホラティウスからの借用に満ちている」と述べて、ゲイが模倣したホラティウスの詩句を示している。⁽²⁷⁾

続く段落では結婚生活に対する揶揄が語られる。憂鬱に憑かれた若者が婚姻を司るハイメンにそそのかされて「ゴルディアスの結び目」(the *Gordian* Knot, l. 23) に喩えられる結婚に縛りつけられるや、昼は口やかましいクサンチッペ(ソクラテスの悪妻)の怒鳴り声に苦しめられ、夜は別の苦勞が待ち受けている。

眠りの優しい露が眠たげな重みで夫の目蓋を傾けるときでも、妻は飽くことのない欲望に燃え上がり、満足することなくむずむずして、夫の貯えを枯渇させ、なおも求めて喚き散らす。彼女は必ずや夫を星辰まで昇天させて、さらに天上の角ある者たち(金牛宮、白羊宮、磨羯宮)の間に彼を据え置いて、

十二宮で最大の怪物にしてしまうのだ。

And when the gentle Dew of sleep inclines
With slumbrous weight his Eye-lids, She inflam'd
With *Uncloy'd* Lust, and itch Insatiable,
His Stock exhausted, still yells on for more;
Nor fails She to Exalt him to the Stars,
And fix him there among the Branched Crew
(*Taurus*, and *Aries*, and *Capricorn*.)
The greatest Monster of the *Zodiac*; (ll. 26-33)

ベルの編纂した『ジョン・ゲイ作品集』(1773)では何ら断りもなしに(自主規制であろう)前半の4行が削られており、⁽²⁸⁾ その後のゲイ詩集でもこれを踏襲しているが、フェイバー版(1926)でようやく復活した。⁽²⁹⁾ 妻の盛んな性的欲求に応じられない夫は、角の生えた怪物すなわちコキュ(妻に浮気された夫の額に角が生えるという俗説)と化してしまう。一方で愛する女性からの拒絶にあったストレフォンは、葡萄酒の力を借りて勢いをつけ、「突破口を襲い、美しい砦を勝ち取る」(He *Storms* the Breach, and *Wins* the Beauteous Fort, l. 67)。デアリングとベックウィズの注釈にあるように「突破口」と「砦」は女性の秘部を指し、葡萄酒は性的な活力を復活させる精力剤として機能する。この詩行はベル版でも削除されていないが、スペンサーの『羊飼いの暦』(*The Shepherdes Calendar*, 1579)を茶化して書いた、ゲイの『羊飼いの一週間』(*The Shepherd's Week*, 1714)にも、このような性的含意のある詩行が散見されることは記しておきたい。

遥かな国々を目指して航海する英国の水夫にとって、「ルシタニア(ポルトガル)の灼熱の海岸、また高きテネリフ、パルマ、フェロ(以上カナリー諸島)、プロヴァンス、あるいはケルティベリア(スペイン)の浜」(Whether, at *Lusitanian* sultry Coasts, / Or lofty *Teneriff*, *Palma*, *Ferro*, / *Provence*, Or at the *Celtiberian* Shores, ll. 76-8) はエデンの園を想起させる楽園である。なぜならそこには紫色の葡萄が大きな房をなして垂れ下がっているからだ。このような耳慣れない地名を列挙するの

は『失樂園』によく見られる特徴の一つである。水夫たちは故郷に残してきた家族や友人も忘れて、葡萄酒を堪能するのである。

著述と葡萄酒は切っても切り離せない関係にあり、ウェルギリウス、ホラティウス、ホメロス、キケロ、デモステネス、エンニウスといった文人たちは、葡萄酒によって靈感や雄弁を得ることができた。エピグラフとして掲げられたホラティウスの書簡詩には、エンニウスが「大いに飲んだ後でなければ、武勲について歌い出すことはなかった」(7-8行)とあり、ゲイはこれを敷衍して、霊泉ヘリコーンの恩恵にあずかれなかったエンニウスも「靈感を与えるネクターの果汁」(inspiring *Nect'rous Juice*, l. 105)たる葡萄酒を飲むことで、「戦の布告や勝ち取った戦利品について高遠な調べで歌う」(of Wars alarms, / And *Trophies* won, in loftiest Numbers sings, ll. 107-8) ことができたと言った。さらにゲイは競争心もあらわにフィリップスについて歌う。

最近彼の詩神はブレニムの野を高々と
舞ったが、今はアリコニウムの沼沢で、
主題と同様に、物憂く、弱々しく、不面目に
もがきながら、湿った翼を酸っぱい果汁の中に
浸して、虚しく飛び上がろうと試みている。

Such as of late o're *Blenheims* Field she soard
Aerial, now in *Ariconian* Bogs
She lies Inglorious floundring, like her *Theme*
Languid and Faint, and on damp Wing
immerg'd
In *acid juice*, in vain attempts to rise. (ll. 122-6)

先に示したように、フィリップスが英国軍の戦勝を祝って書いた『ブレニム』の冒頭には「はいつくばる詩神は卑俗で惨めな主題から、今や天空に舞い上がる」(From low and abject Themes the Grow'ling Muse / Now mounts *Aerial*, ll. 1-2) とある。これはフィリップスが、ミルトンの『失樂園』

を滑稽にもじって書いた「光り輝くシリング銀貨」から、勇壮な英雄詩『ブレニム』に主題を転換したことを表わしている。またフィリップスは「アリコニウム」(ヘリフォード周辺にあった古代ローマの都市)の特産品サイダーを称える『林檎酒』を書いたが、代わりに葡萄酒を歌ってれば、彼の詩神はなおも高みに留まっていたであろうとゲイは揶揄する。だが『葡萄酒』と『林檎酒』を比較すれば、誰しもフィリップスに軍配を上げるであろう。引用後半の3行は先輩詩人に対抗しようとしてもがくゲイの心情を写しているように思われてならない。

一方でゲイは騒々しい街を避けて田園の屋敷に隠棲したホラティウスに呼びかける。

そこでは白いポプラや、背の高い松が
隣り合う枝を重ねて、甘美で快適な木蔭を
作り出し、フィーバスの光から退いて、
涼しげな避難所で、選り抜いた少数の友と、
花咲く草地の上で四肢を伸ばして、無害な
歓楽と歌い交わす詩に時を過ごすのだ。

Where the white *Poplar*, and the lofty *Pine*
Join Neighbouring Boughs, sweet Hospitable shade
Creating, from Phoebean Rays secure,
A cool Retreat, with few well chosen Friends
On flowry Mead Recumbent, spent the Hours
In Mirth innocuous, and Alternate Verse! (ll. 130-5)

これは「カルペ・ディエム」で知られる『オード集』第2巻第3番の引き写しである。⁽³⁰⁾そして彼らの傍らにあったのはイタリア各地の名産である種々の葡萄酒に他ならず、ゲイは葡萄酒が詩人に靈感を与えるという効能を示しているわけである。

フォルミアエ、ファレルヌス、セツア、マッシュクス、
ガウラス、サビーニー、レスビア、カエクブム、
どこの葡萄から絞ったものであれ、活気づける盃は
活発に動き回って、高められた才気に拍車をかけ、
心あるパトロンのマエケーナスへの讃歌を歌った。

Whether from Formian Grape depress'd, *Falern*
 Or *Setin, Massic, Gauran* or *Sabine*,
Lesbian or *Caecuban*, the chearing Bowl
 Mov'd briskly round, and spur'd their heightned Wit
 To Sing *Mecænas* praise their *Patron* kind. (ll. 140-5)

これもホラティウスが田舎の屋敷にマエケーナスを招く『オード集』第1巻第20番を敷衍した詩行で、ゲイが列挙した8種類の葡萄酒のうち半数が原典にも見られる。⁽³⁵⁾ ゲイの作品には『トリヴィア』や『乞食オペラ』など都会生活を扱ったものと、『田園の狩り』や『羊飼いの一週間』のように田園生活を扱ったものがある。『葡萄酒』は全体としては都会ものに分類されるが、このホラティウスに触れた箇所には田園の隠棲生活を羨むゲイの心情が透けて見える。

後半はロンドンの居酒屋で繰り広げられる酒宴が中心となり、語り手は選ばれた友人たちと連れ立って「新旧の悪魔亭」(Devil Young or Old, l. 151)に赴く。入口では人懐っこい仔犬のメランパスが客を迎え、二階に上がる階段脇には「厳かな婦人」(a Majestic Dame, l. 163)が玉座に鎮座して、「かしく奴隷ども」(Attendant Slaves, l. 169)に恐ろしい命令を振りまき、不明瞭な言葉で喚き散らされる注文を聞き取っては、不可解な文字で伝票に記していく。彼女はまるで魔王のごとく「悪魔亭」を支配している。

ちなみに旧「悪魔(と聖ダンスタン)亭」は17世紀初頭にベン・ジョンソンが「息子たち」と呼ばれる後輩詩人たちと「アポロの間」で親しく語った酒場として知られる。ジョンソンは「宴席の掟」と題された「アポロの間」での振る舞い方について24条からなる規則をラテン語でしたためた。「悪魔亭」に足繁く通い、「ジョンソンの12人の詩的な継嗣たちの一人」⁽³¹⁾とされるアレキサンダー・ブルームの英訳(1661)で紹介しよう。客人と会員は別格として「学識あり、礼儀正しく、陽気な者、慎み深い者と、選りすぐりの女性」(3-4行)だけが入場を許され、「愚鈍、愚者、泣き虫、不潔な者」(2

行)は去るべし。葡萄酒は「混ぜることなく、泡立たせて、水で割るべからず」(11行)とあり、飲み比べではなく機知に富んだ会話で競うべし、真面目な話題や信仰の話題は厳禁だが、「笑い、飛び跳ね、踊り、冗談を言い、歌う」(21行)ことは場を盛り上げるために推奨される。無味乾燥な詩を朗唱してはまずく、部屋の隅で失恋を嘆いてもいけない。グラスや窓を割ったり、壁掛けを破いたりするのは論外である。宴席の振る舞いや発言について公にした者は集まりから追放されねばならぬ。⁽³²⁾ このように「悪魔亭」におけるジョンソンたちの宴会は単なる憂さ晴らしの飲み会ではなく、秩序を保つための「酒場学院の規則」(1692年版の英訳)にある程度まで縛られた集いであったことがうかがわれる。⁽³³⁾

アディソンは『スペクテイター』第9号(1711)で「人間は社交を好む動物である」という主題の下でさまざまなクラブに触れた後に、エールハウスの壁に貼ってあった「二ペンスクラブ」の規則を紹介する。第4条「会員が悪態をついたり、悪罵を吐いたりした場合、隣席の者はその者の向こうずねを蹴ってもよい」、第9条「会員が別の会員を寝取られ男と呼んだ場合、その者はクラブから追放される」など、このクラブの倫理は「健全な掟と罰則」によって守られているので、ジョンソンの「宴席の掟」に親しんでいる者も満足するだろうとアディソンは記す。⁽³⁴⁾ 無論これはジョンソンの「掟」をパロディにしたアディソンの創作であろうが、このような規則で拘束しなければ、楽しい社交の場も荒れ放題となったであろうことは想像に難くない。

また作者不詳の『はしご酒、すなわち王冠亭から悪魔亭への酔いどれ歩き』(1702)は、浮世の生き辛さに鬱々とする二人の男がロンドンの酒場を次々と訪れて痛飲するという作品だが、彼らの終着点である「旧悪魔亭」は以下のように描かれている。⁽³⁵⁾ 二人が招き入れられたのは狭いが「天井に蜘蛛の巣はなく、床には反吐もない」(No Cob-webs o'er-head, neither Spawl under-feet, l. 436)という居心地よく小ぎれいな部屋で、席に着くと葡萄酒、二本の蠟燭、一つかみの煙草に加えて、おまるまでが持ってこられる。給仕たちは忙しく働き、客が気楽に飲食

できるように気を配っている。主人は愛想がよく、葡萄酒は上等である。また「アポロの間」の命名については、最初に手掛けた者の才知によるものではなく、とても広壮であるためだと語り手は主張する。この詩で二人は数多くの酒場を訪れるが、そこで飲む酒がいずれも葡萄酒であることは興味深い。

ゲイの『葡萄酒』ではどうか。語り手は「バッコス祭の荘厳な儀式」(*Bacchanalian solemn rites*, l. 185) にふさわしくない振る舞いを列挙するが、その中に「やかましいケンタウロスと耳障りな声のラピタイ族の諍い」(*The loud Centaurean Broiles with Lapithæ / Sound harsh*, ll. 179-80) という詩句がある。これはオウィディウスの『変身物語』第12巻で、ラピタイ族の結婚式に招かれたケンタウロスが酔っぼらって食卓をひっくり返し、女たちを拉致しようとしたために血みどろの戦いになるという話である。フィリップスの『林檎酒』にも「ケンタウルスの話をここで繰り返すまい。いかに欲情と酒に興奮して彼らが闘い、宴の時に酔い潰れた魂をこぼしたか」(*Nor the Centaurs Tale / Be here repeated; how with Lust, and Wine / Inflam'd, they fought, and spilt their drunken Souls / At feasting Hour. Cyder, 2: 476-9*) とあるが、ジョンソンの「掟」第22条にも「古のラピタイ族のように酒盃片手に争う」ことが戒められている。この個所はブルームの英訳では「ヘクトールのように」と改変されているために1692年版の英訳を参照した。

さらに『葡萄酒』の語り手は、バッコス祭には弦楽や声楽などが似合うとして、「デロス島の神(アポロ)は軽快なバッコスにふさわしく結びつく」(*the Delian God / For Airy BACCHUS is Associate meet*, ll. 191-2) と締めくくる。フォルスグレンは彼らの酒宴は「アポロの間」で催されたと主張するが、明確な証拠を作品の中から読み取ることはできない。⁽³⁶⁾ ただし先に引用したように、彼らの「バッコス祭」がアポロと結びつけられていることは確かである。また以下の引用にジョンソンの「掟」が影響を及ぼしていると考えるのは穿ちすぎであろうか。

中断が続いた後、今や快適な会話で

我々は間を取り持ち、喜ばしい歓楽が
我々の高揚した魂を捉え、当意即妙の応答、
機知の効いた冗談が、我々の快活な感覚を
快い笑いへと誘い、すぐに響き渡る部屋は
満場の拍手と叫びで鳴り響くのだ。

A Pause ensues, and now with grateful Chat
We improve the *Interval*, and Joyous Mirth
Engages our *rais'd* Souls, Pat Repartee,
Or Witty Joke our airy Senses moves
To pleasant *Laughter*; strait the Ecchoing Room
With Universal *Peals* and Shouts Resounds. (ll. 218-22)

二階に案内されて席に着いた一行に対して、ウェイターがお勧めの葡萄酒のリストを並び立てる。これはホラティウスのオードにあるイタリア葡萄酒のリストを模倣したものであろう。

シャンパーニュ、バーガンディ、純粋なフィレンツェ、
年代物のホック、新旧取り混ぜたリスボン、
ボルドー、さっぱりしたフランスの白、アリカンテ。
ボルドーと我々は声を揃えて断言する、
(こうした共感気は気の合った仲間のもの)。

Champaign or *Burgundy*, or *Florence* pure,
Or *Hock* Antique, or *Lisbon* New or Old,
Bourdeaux, or neat *French* Wine, or *Alicant*:
For *Bourdeaux* we with Voice Unanimous
Declare, (such Sympathy's in Boon *Compeers*.)
(ll. 198-202)

ここに挙げられているのはフランス、イタリア、ポルトガル、スペインの葡萄酒であり、当然のことながら英国産の葡萄酒は含まれていない。フィリップスが『林檎酒』で「シルリア(ヘリフォード周辺の古名)で生まれた林檎酒は、万人の味覚を満足させ、葡萄酒に優るであろう」(*Silurian Cyder borne / Shall please all Tasts, and triumph o'er the Vine. Cyder, 2: 668-9*) と歌い上げたのと対照的である。

アン女王に続いて夫のジョージに乾杯が捧げられ、モールバラを始めとする五人のホイッグの大物たちが讃えられる。この個所をめぐるゲイの政治的な信条について批評家たちは頭を悩ませてきたが、『林檎酒』でトーリーの政治家たちを称賛したフィリップスに対抗するように、ゲイは「ホイッグのフィリップス」たらんとしたというペリサーの解釈が妥当なように思われる。⁽³⁷⁾

政治家たちの後に乾杯の栄誉にあずかるのは美女たちである。黒い瞳で突き刺すようなシルビアと、陽気で快活なシーリアは牧歌などでよく見られる名前であるが、「コスメリア」(*Cosmelia*, l. 252)は化粧が濃いのであろうし、「ダルシベラ」(*Dulcibella*, l. 252)は「ダルセット」(甘い)と「ペラ」(美女)の合成語であろう。このような命名法は後に『羊飼いの一週間』にも引き継がれることになる。

かくして無害な歓楽のうちに時は過ぎ去り、馬車のけたたましい騒音も松明持ちの掛け声も聞こえず、あたりは静寂に包まれている。語り手の一行はうたた寝している給仕を起こして、物惜しみせずに勘定を支払い、しっかりした足取りで家路をたどるが、「心労と硬貨を失う」(*of Cares and Coin bereft*, l. 278)のであった。フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」では、困窮した詩人が酒場でエールを飲み干し、クロエやフィリスに乾杯し、煙草をふかして友人たちとの語らいを楽しむことを夢想する。だが彼はズボンに開いた穴に呻吟するばかりで、彼の願望が成就することは決してないのである。それに対して『葡萄酒』の語り手は「悪魔亭」で満足するまで飲食を堪能して、散財はしたものの憂さ晴らしはしっかりしているのだ。ゲイの『葡萄酒』は完成度からして、フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」や『林檎酒』に到底及ばないであろう。しかし『田園の狩り』に見られるゲイの田園生活への憧れが垣間見ると同時に、『トリヴィア』に結実するロンドン生活の愉しみも確かに感じられる。『葡萄酒』はゲイの傑作群への序章と考えられるのである。

注

(1) John Philips, *The Splendid Shilling. An Imitation of*

Milton (London: Tho. Bennet, 1705)

(2) John Philips, *Cyder. A Poem* (London: Jacob Tonson, 1708) 『林檎酒』については拙著『田園の詩神—十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社, 2005) 35-57. を参照されたい。

(3) Elijah Fenton, *Cerealia: An Imitation of Milton* (London: Thomas Bennet, 1706)

(4) John Gay, *Wine A Poem* (London: William Keble, 1708)

(5) Nahum Tate, *Panecaea: a Poem upon Tea: In Two Canto's* (London: J. Roberts, 1700)

(6) "Mr. John Philips's designed Dedication to the Poem called The Splendid Shilling. To W. Brome, Esq, of Ewithington, in the County of Hereford," *Additions to the Works of Alexander Pope, Esq.* 2 vols (London: H. Baldwin, 1776) 1: 188-91.

(7) Raymond Dexter Havens, *The Influence of Milton on English Poetry* (Cambridge: Harvard University Press, 1922) 96, 100.

(8) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Harvard University Press, 1932) 106-7.

(9) Joseph Addison, *The Tatler*, ed. Donald F. Bond, 3vols (Oxford: Clarendon Press, 1987) 3: 272.

(10) Henry Felton, *A Dissertation on Reading the Classics, and Forming a Just Style* (London: Jonah Bowyer, 1713) 214.

(11) Oliver Goldsmith, *The Beauties of English Poesy*, 2vols (London: William Griffin, 1767) 1: 235.

(12) *The Poetical Works of John Milton*, ed. Helen Darbishire, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1952) 本論における『失樂園』の引用はこの版に拠る。

(13) Dustin Griffin, "The Bard of Cyder-Land: John Philips and Miltonic Imitation," *SEL* 24 (1984) 445.

(14) Edmund Smith, "A Prefatory Discourse to the Poem on Mr. Philips, with a character of his writings," Samuel Johnson, "J. Philips," *The Lives of the Most Eminent English Poets*, ed. Roger Lonsdale, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 2: 74.

(15) John Philips, *Bleinheim, A Poem* (London: Tho.

- Bennet, 1705)
- (16) Samuel Johnson, *The Lives of the most Eminent English Poets*, ed. Roger Lonsdale, 4vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 3: 90-1.
- (17) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 3: 121.
- (18) John Wooll, *Biographical Memoirs of the late Revd. Joseph Warton, D. D.* (London: T. Cadell & W. Davies, 1806) 203.
- (19) Elijah Fenton, "The Life of John Milton," *Paradise Lost. A Poem in Twelve Books* (London: Jacob Tonson, 1725) xxii.
- (20) オウイディウス『祭暦』高橋宏幸訳 (国文社, 1994) 319-20.
- (21) Havens, 97-8.
- (22) John Gay, *Poems on Several Occasions*, 2vols (London: Jacob Tonson, 1720)
- (23) Austin Dobson, *Fables by Mr. John Gay* (London: Kegan Paul, 1882) xiv.
- (24) Horace, *Satires, Epistles, Ars Poetica*, trans. H. R. Fairclough (Cambridge: Harvard University Press, 1929) 281.
- (25) Havens, 107.
- (26) *John Gay Poetry and Prose*, eds. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1974)2: 474-85.
- (27) Caroline Goad, *Horace in the English Literature of the Eighteenth Century* (1918; New York: Haskill House, 1967) 118.
- (28) *The Poetical Works of John Gay*, ed. John Bell, 3vols (1773; London: G. Cauthorn, 1797) 2: 171.
- (29) *The Poetical Works of John Gay*, ed. G. C. Faber (London: Oxford University Press, 1926) 1-8.
- (30) Horace, *Odes and Epodes*, trans. C. E. Bennet (Cambridge: Harvard University Press, 1927) 113-5. ホラティウスのオードの引用はこの版に拠る。
- (31) John Timbs, *Club Life of London*, 2vols (London: Richard Bentley, 1866) 1: 12.
- (32) Ben Jonson, "Leges Convivales," & "Alexander Brome's Translation of the Leges Convivales Ben Jonson's Sociable Rules for the Apollo," Ben Jonson *Poems*, ed. Ian Donaldson (London: Oxford University Press, 1975) 370-1. 「宴席の掟」については Percy Simpson, "Ben Jonson and the Devil Tavern," *MLR* 34 (1939) 367-73. に詳しい。
- (33) Anonymous, "Rules for the Tavern Academy, & C.," *The Works of Ben Jonson* (London: Thomas Hodgkin, 1692) 738-9.
- (34) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 1: 43.
- (35) Anonymous, *The Tavern-Hunter; or A Drunken Ramble from the Crown to the Devil* (London: Booksellers of London and Westminster, 1702)
- (36) Adina Forsgren, *John Gay Poet "of a Lower Order"* 2vols (Stockholm: Natur Och Kultur, 1964) 1: 66.
- (37) Juan Christian Pellicer, "John Gay, Wine (1708) and the Whigs," *British Journal for Eighteenth-Century Studies* 27 (2004) 245-55. 他に『葡萄酒』におけるゲイの政治的信条について論じているのは, *John Gay Poetry and Prose*, 483-4., J. A. Downie, "Gay's Politics," *John Gay and the Scriblerians*, eds. Peter Lewis & Nigel Wood (London: Vision Press, 1988) 44-59., David Nokes, *John Gay: A Profession of Friendship* (Oxford: Oxford University Press, 1995) 55-60.

